赤と青の神話　一章

深江　碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤と青の神話　一章

【Ｎコード】
Ｎ７５５６Ｘ

【作者名】
深江　碧

【あらすじ】
地上に生まれ変わった水の女神は、化け物の姿で、深い森の中に住んでいた。
近隣を治める王は、彼女を討伐しようと何人もの兵を森へ送ったが、誰も彼女を倒せるものはいなかった。
そんなとき、三人の若者が現れ、化け物を退治しようと名乗りを上げる。
王は喜び、見事化け物を倒したものには、自分の娘である姫と結婚させようと言うのだった。

「赤と青の神話　序章」の続きです。
長くなりそうなので、一章ごとに区切っています。
よろしくお願いします。

森の化け物１

一章　森の化け物

彼女は世界にあるすべてのものが憎く、地上に生きるすべての生き物が恨めしかった。
木々の間から差し込む木漏れ日も、湖面を吹き渡る風も、岸辺に打ち寄せるさざ波さえも、何もかもが嫌で仕方がなかった。
彼女は特に森に住む生き物やそのそばに住む人間が嫌いだった。
空高くさえずる小鳥も、木のうろに住む子鹿も、湖でゆったりと泳ぐ魚も、畑を耕す村の親子も、彼女にとっては目障りで仕方なかった。
暗く冷たく静かな世界。
彼女はそんな世界を望んでいた。
彼女のそんな思いからだろうか。
いつしか彼女の住む森は木々が高く生い茂り、小川の水は濁り、臭気を放つようになった。
近隣の村々の井戸は枯れ、土はぬかるみ、畑の作物は育たなくなった。
村人達は住み慣れた村を捨て、移住せざるをえなくなった。
人の住まなくなった村々は、木々に飲み込まれ、暗い森の一部となっていった。

その地方を治める南の王は、作物が出来なくなった原因を突き止めようと、幾人もの人々を森に遣わした。
しかし、誰一人として戻ってきた者はいなかった。

そのうちに、その森には恐ろしい化け物が住むという噂がどこからかささやかれ始めた。
困り果てた王は、土地が腐る原因を突き止め、見事化け物を退治してきた者には、莫大な財宝と自分の娘であるフィエルナ姫を与えようとお触れを出した。
腕に覚えのある者達が集まり、暗い森に次々と挑んでいったが、無事に戻ってくる者はいなかった。
ある者は腕を、ある者は足を失い、息も絶え絶えに戻ってきた。
戻ってきた者達は、口をそろえて森に住む化け物のことを語った。
人々はますます恐れて、一年もすると森へ行こうという者は誰もいなくなった。
ある日、王の元に三人の若者がやってきた。
森の化け物を退治しようという若者三人に、王は喜び祝宴を開いてもてなした。
祝宴には数頭の子牛の丸焼きや森の果実、川魚などの料理が並べられ、広間は数百本のロウソクの灯りで真昼のように照らし出された。

森の化け物2

王は酒の入った杯を片手に、ほろ酔い加減にフィエルナ姫に声をかけた。

「お前の花婿が、この三人の中から見つかるかもしれないぞ。森の化け物を倒すほどの勇気あるものが、次の王になるのだからな」

王はそういって豪快に笑う。

フィエルナ姫は広間を見渡し、そばにいた若者に近づいていった。

一人目の若者は、ヒーネと言う貴族だった。

彼はうやうやしくひざまずき、フィエルナ姫の手に口づけする。

「お可哀想な姫、すぐにわたしが化け物を退治して、お父上の悩みを解決して差し上げましょう。そしてその暁には、ぜひわたしの妻になってください」

フィエルナ姫はお辞儀をして、おしゃべりをしている人々をすり抜けて行く。

広間の隅のテーブルの前で酒を飲んでいた若者に声をかけた。

二人目の若者は、ケーディンと言う傭兵だった。

彼は大きな体で見下ろすように、無愛想に頭を下げる。

「森に住む化け物を退治すれば、莫大な金貨が手に入るというのは本当かい、姫さん。本当にそうかどうか、領主に念を押しておいてくれないか？」

フィエルナ姫はケーディンに、父は約束を破らないと言って、広間を見渡した。

広間のどこを探しても三人目の若者が見当たらない。

フィエルナ姫は近くの人々に、三人目の若者の居場所を尋ねた。

ある者が、広間を出て行くのを見た、と言い、フィエルナ姫は若者を探しに出かけた。

広間を出ると、フィエルナ姫の耳に物悲しい竪琴の調べが聞こえてきた。

竪琴の音に導かれるように、廊下を曲がり、塔の階段を上へ上へと登っていく。
塔の最上階に一人の若者が月明かりに照らされて座っていた。
三人目の若者はクロフと言う吟遊詩人だった。
クロフはフィエルナ姫の姿に気付くと、竪琴の手を休め立ち上がる。
「ご機嫌麗しゅう、姫。この度はどのようなご用でここまでいらしたのでしょうか？」
フィエルナ姫はクロフの前まで歩いていくと、他の若者にしたのと同じ質問をした。
「あなたはどうして森の化け物を退治しようと思ったのです？　命が惜しくは無いのですか？」
するとクロフは黙り込み、暗い空に目を向けた。
夜空には白い月がぽっかりと浮かんでいた。
「命が惜しくないと言ったら、嘘になりますね」
クロフは夜空から視線を戻し、月の光に照らされた赤金色の瞳でフィエルナ姫を見つめる。
「しかし、ぼくにはそれをやり遂げなくてはならない理由があります。太陽の女神様がそうするように神殿に啓示を下されたのです。そうしてぼくは地方を巡る神官、吟遊詩人として、動物や小鳥たちに導かれ、ここにやってきたのです」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7556x/

赤と青の神話　一章

2011年10月21日06時59分発行